

言語感覚を磨く俳句の指導

——重複表現を推敲の視点として——

藤田 万喜子

一、はじめに

学習指導要領の国語科の目標には、言語感覚について、小学校では「言語感覚を養い」、中学校では「言語感覚を豊かにし」と記されている。ここから、言語の教育と言われる国語科教育において、「言語感覚を磨くことは欠かすことができないもの」と位置づけられていることが分る。この言語感覚を磨く指導の一方法として、日本の伝統文芸の一つである俳句に着目し、「岐阜聖徳学園大学国語国文」で、「言語感覚を磨く俳句の指導―埋め字の方法を用いて―」（第24号）、「俳句創作指導における実践と提案―取り合わせの方法を用いて―」（第25号）と題して実践研究を報告してきた。今回は、結社の俳句雑誌における子ども欄の現状調査報告、および、俳句創作指導における推敲の方法の実践と提案を行いたい。

二、俳句結社誌における子ども俳句欄の現状

今回、俳句結社誌における子ども欄の現状を調査するに当たって対象としたのは、俳句総合雑誌「俳壇」に毎月全国から送られてくる雑誌のうちの、平成一八年三月号である。調査した雑誌数は四二〇冊。このうち、子ども欄を設けている雑誌は六一誌（一五％）で、子ども俳人の育成を行っている雑誌が二割に満たないことが分った。しかしながら、子ども欄を設けていない三五九誌（八五％）の中に「素晴らしい子どももの詩精神に触れて」（平田繭子 「現代俳句」平18年3月号）を掲載している一誌があり、継続的に子供俳句欄を設けていない雑誌も、子ども俳句の育成に眼を向けていることが分った。

子ども欄を設けていたのは次の雑誌であった。

・青嶺・朝・虎杖・伊吹嶺・うぐいす・雨月・うまや
 ・苑・燕巢・円虹・廻廊・加里場・かつらぎ・狩・カリ
 オン・甘藍・桔槔・絹・木の中・喜見城・球・景象
 ・夏至・舷燈・煌星・航標・早苗・朱欒・七曜・春月
 ・青女・西陲・太陽・玉梓・築港・天衣・天穹・天為
 ・同人・遠嶺・遠矢・水葱・波・初蝶・花・春野
 ・ひまわり・姫沙羅・百燈・風鈴・落・冬草・文・ホト
 トギス・港・萌・やまびこ・悠・雪垣・若竹・湾

次に、子ども欄を設けている雑誌六一誌の実態について調査した結果を記し考察したい。

1 ページ数

雑誌が子ども欄にどの程度誌面を割いているかを調べた。

・二分の一頁未満	22誌 (内、四分の一頁 21誌)
・二分の一〜一頁未満	12誌
・一頁〜二頁未満	16誌 (内、一頁 13誌)
・二頁〜三頁未満	4誌 (内、二頁 3誌)
・三頁	3誌
・四頁	2誌

・五頁 1誌
 ・一〇頁以上 1誌

一〇頁以上を当てている雑誌が一誌あるが、この雑誌は他に比べるところかなり重点を置いていようである。これは「ジュニアの部」として数校の児童生徒の俳句の紹介と「ジュニアの部のみなさんへ」として「選評」が掲載されている「虎杖」という雑誌である。この欄は一五頁だったので、これを雑誌総頁数の割合で見ると一五%である。俳句の盛んな松山で発行されていることも要因と考えるが、かなり子ども欄に力を入れているようである。

このような雑誌もあるが、六一誌全体を見ると、四分の一頁を割いている雑誌が最も多く、二一誌ある。一頁を当てている雑誌が一三誌あり、誌面の一頁以下を子ども俳句のために割いている雑誌は全部で四七誌で、全体の七七%である。これを誌面の二頁以下まで拡げて見ると、二頁を当てている雑誌数は三誌あり、誌面の二頁以下を子ども俳句のために割いている雑誌は五三誌となり、全体の八七%を占めることになる。総頁数が八〇頁〜一〇〇頁の雑誌が多く、その二頁程が子ども欄に与えられていることになる。「虎杖」誌と比べると力の入れようは約一〇分の一になる。今回の調査の結果、俳句界は高齢化に危機感を持っているものの、結社誌において子ども俳人の育成に力を注ぎ、その誌面を割いているものはごく少数で

あることが分った。

2 年齢層

年齢層を幼稚園・小学生・中学生・高校生に分けて調査した。

- | | | | |
|--------|-------------------------|----------|-----|
| ・幼稚園のみ | 1誌 | ・小学生のみ | 25誌 |
| ・高校生のみ | 1誌 | ・幼・小 | 6誌 |
| ・小・中 | 14誌 | ・中・高 | 3誌 |
| ・幼・小・中 | 4誌 | ・幼・小・高 | 1誌 |
| ・小・中・高 | 3誌 | ・幼・小・中・高 | 1誌 |
| ・無記載 | 2誌(幼稚園或いは小学校低学年と推定できるが) | | |

今回は平成一八年三月号を対象としたので、このような結果になった。

一番多いのは小学生のみを対象とした雑誌で、二五誌あり、四一%を占めている。その次は小・中対象とした雑誌、一四誌。そして幼・小を対象とした雑誌、六誌と続く。これらを全体の割合で示すと七四%となる。

低年齢層の投句が多いのは、雑誌に属している会員に因ると考えられる。つまり、会員(祖母・祖父など大人)が手ほどきをして孫(子ども)などに作句させて投稿させていると推測されるからである。祖父母との交流が深い間の参加であろう。成長するに従い、祖

父母から離れ、子どもは自己の興味を優先していくのではないかと考えられる。

3 内容

子ども欄がどのように扱われているかを掲載の仕方調査した。

- (1) 会員(大人)の雑詠欄の続きに作品を掲載(雑詠欄に付属) 47誌
 - (2) 同人の欄の初めに作品の掲載(同人欄に付属) 1誌
 - (3) 雑詠や同人の欄に付属するのではなく、子ども欄を設けている(独立) 13誌
- のように大きく分類できる。この中の(3)は、さらに

①作品の掲載

6誌

②作品の掲載と鑑賞や選評の掲載

7誌

のように分類できる。

雑誌に設けられた子ども欄の名称は次のようになっている。()

内は雑誌名。

- ①若鮎集(伊吹嶺) ・どんぐり教室(廻廊) ・うつみね集(桔
樟) ・早苗子ども俳句(早苗) ・児童作品(玉梓) ・春草
集(春月)

②こども俳句（朝） ・ジュニアの部（虎杖） ・今月の天蚕集

（絹） ・煌星子ども俳句（煌星） ・南光集（朱樂） ・子供俳

句プリズム（太陽） ・ふた葉ガーデン（若竹）

子どもに受け入れられるような名称をつけ、その誌面も飾りを付けるなど子どもらしさを配慮したものが多かった。

俳句は年寄りが行うものと言った先入観を取り去ろうという努力がうかがえる。

以上、四二〇雑誌の実態をまとめたが、子ども欄を設けていない雑誌においても、例えば

・「平成十七年度北九州市八幡西区文化祭俳句大会 講演抄録 子

ども達に俳句をつなごう」の掲載（「青嶺」平成18年1月号）

・「現代俳句鑑賞」と題して作品掲載と鑑賞の掲載（「夏爐」平成18年1月号）

・「修学旅行俳句」と題して作品掲載（「ぐるっけ」平成18年10月号）

・「『俳句』をとおして豊かな心を育てる」と題して小学校における俳句への取組みの報告（「現代俳句」平成18年9月号）

・「子供俳句教室体験記」と題して小学校における俳人による俳句指導の報告（「西陲」平成18年10月号）

などのような子ども俳句に関係するものを入れていくことがある。

こうした結社誌の動向も後に続く若い俳人の育成の試みとして見落してはならないと考える。

三、俳句の指導 実践対象と実践過程

俳句の創作指導を行うときに先ず確認することは有季定型、

・五・七・五（一七音）であること

・季語を入れること

というルールである。

これを確認して創作させたところ、大きく分けて

1 五・七・五のリズムを持たず、字余りとなっている

2 一句の中に季語が二つ以上入っている

3 その言葉があれば連想できる言葉が入っている

4 季語の説明になっている

5 句跨り（注）になっている

などの作品が出来上がった。これらを推敲してより良い作品にした中で日本語運用力を身につけ、言語感覚を磨こうというのが今回の実践の中心である。

1 については、五・七・五に収まる言葉を見つけ出すこと

2 については、季重なりは出来るだけ避けること、重なっている

場合は重点のある方を一句の中の季語とするが、
初めのうちは季語を一つにすること

のように助言することで推敲が出来る。

3以下については作者の表現したい内容に深く関わるので、個々の作品に沿った指導・助言が必要となるが、3は「俳句は省略の文学」と言われることに関わった推敲対象であり、4は「歳時記」などで示されているところの、作句上必要な共有する季語の概念に関わった推敲対象である。いずれも十七音という限られた詩形の宿命とも言える推敲の視点である。5は「破調」、つまりリズムに関わる推敲対象である。

今回は3の「その言葉があれば連想できる言葉が入っている」作品の推敲の仕方を学ぶ実践を報告したい。

これは俳句の技法で言えば省略に属する。例えば「頭痛が痛い」「遺留品が残っていないか調べる」「骨折が折れた」などは意味の上で重なりがあり、不自然な表現であることが一瞬で判断できる。そして正しく表現することが出来る。例えば「米洗ふ前を螢の二三つ」という俳句では、「飛ぶ」などという動詞が省略されている。しかし、この言葉が無くても眼前を飛んでいる螢が表現できている。ある言葉から連想されること（言葉）や意味の重なる言葉を省略することが、一七音という短い詩形に奥行きを与え、効果的なのであ

る。短い故に言葉の一つ一つがしっかりと一七音の中で働いている必要があるからである。つまり、言葉の効用に留意した言語感覚を必要とするわけで、この営みが言語能力を高めるのである。

実践対象

実践の対象としたのは、筆者が機会を得て俳句指導に関わることになった、大学生（以下初心者とする）とカルチャーの受講生（年齢六〇・七〇代、俳句歴一〇年〜一五年の方。以下熟練者とする）である。

実践過程

実践1 「繰りかへし降りては眺め松手入れ」の句を例に重複表現を見つけ、限られた五七五（一七音）における言葉の重みを実感させる。

ねらい
・提示した句における省いてもよい言葉（不要な言葉）を見つけ、俳句的表現を意識する。

実践2 入れ替えた言葉によって出来た句の吟味をさせる。

ねらい
・意図に合った推敲であるかを見分けることができる。

実践3 実践1の例に倣って言葉の重複部分を発見させる。

ねらい
・より良い俳句的表現にすることを意識し、意味の上で

重複している部分を指摘することができる。

実践4 実践3で発見した重複表現のどちらかを省き、推敲句を作らせる。

ねらい ・意味の上で重複している表現の一つを省き、そこへ言葉を入れ、推敲句を作る。

実践5 実践3を再度行い、俳句的表現を意識させる。

実践6 実践4を再度行い、俳句的表現を意識させる。(重複表現のうち省く言葉を空欄とし、入れ替える言葉を考えさせる。)

以下、実践1〜実践6までの結果と考察を述べてゆきたい。

四、実践1 俳句的表現の意識

課題A 次の作品を推敲したい。省いてもよい言葉(不要な言葉)はどれでしょう。「繰りかへし」・「降りては」・「眺め」の中から一つ選びなさい。

繰りかへし 降りては 眺め 松手入れ

課題B 立派な松の手入れをしている光景とするために、省いた所へどのような言葉を入れますか。

留意点 俳句には省略が必要。ある言葉から連想されること(言葉)を省くことが、一七音という短い詩形に奥行きを与え、効果的であることを説明する。その後、意味の上で重複している表現を発見し、省いてもよい言葉を選ぶように指示する。

これを初心者(一八人)と熟練者(一五人)に行った結果、課題Aは次のようになった。

選んだ語句	初心者人数	熟練者人数
<u>繰りかへし</u>	9	13
<u>降りては</u>	7	2
<u>眺め</u>	2	0

両者とも「繰りかへし」を選んだものが多かった。ここで注目したいのは「眺め」を選んだ点である。熟練者は誰も選んでいないに初心者では二人が選んでいる。この差は俳句的表現が身に付いているかいないかの差と思われる。この句の場合、「眺め」は必要な言葉であり、省く言葉を迷うのであれば「繰りかへし」か「降りては」のいずれかである。俳句的表現が身に付いている熟練者はこれ

を直感的に判断したものと思われる。そこで、初心者には省くべき言葉とした理由を尋ね、どの言葉がどの言葉と意味の上で重複するのかを確認することにした。以下流れに従って記すことにする。

(1) 「眺め」を選んだ理由を尋ねた。

初心者1 眺めるというと遠くを見るような意味になると思うから。

(全部省けないと思った。)

初心者2 松を見ていることは想像がつくから。

ということだった。

(2) 次に他の意見を尋ねた。主な意見を紹介する。

初心者3 「繰りかへし」と「眺め」があれば「降りて」は要らな

い。

初心者4 松手入れの為に必要なことは松全体を眺めて形を整える

こと。繰りかえし眺めては切る、眺めては切るの作業にな

るから。

以上は「降りては」を省くとしたもの。

初心者5 「繰りかへし」がなくても「降りては」だけで何度も

降りていることが分るから。

初心者5 「降りては」の「ては」があることで繰り返されている

ことが分るから。

初心者6 降りるといふ動きを繰り返しているので「降りては」の

方が上るといふ動きも想像できるし、いろいろな情景が分るから、「繰りかへし」を省く。

初心者7 降りるといふ言葉がないと高いところから降りて見ていることが分らないし、「ては」があることで繰り返されていることが伝わってくるので。

これらは、「繰りかへし」を省くとしたものだが、「繰りかへし」を省くとした者の理由に「繰りかえし」といふ言葉は他の言葉に比べて俳句のバランスがよくないと思うから」というのもあり、しっかり句の意味を解していないことが分った。そこで、方向を変えて句の解釈を行うことにした。

(3) 季語が「松手入れ」(秋)であることを確認し、「眺め」「降り」「繰りかへし」の主語を尋ねた。

動作の主体は松の手入れをしている人。この人が繰りかえし降りては眺め、松を手入れしているという意味であることを確認した。

(4) 次に、「ては」の意味・使い方を確認した。

「ては」は接続助詞テに係助詞ハの添ったもので、繰り返し行われることを表す。何回でも・・・している。「書いては消し、消してはまた書く」のように使う。

(5) 以上を受けて、「繰りかへし降りては眺め松手入れ」は梯子に上っては少し鉄を入れ、降りてはまた眺めと、丹念に松の手入れ

をしているところを描いた句であることを押さえた。よって、この句の場合、「繰りかへし」が不要。理由は、「降りては」がすでに何度もと言う意味を含んでいるから。上五を「高きより」とすると、木の高きが出て、名園などの立派な松の手入れをしている光景をうかがわせる句になり、重複表現もなくなる。つまり、この句の重複表現は「繰りかへし」と「降りては」であり、省く表現は「眺め」ではなく、「繰りかへし」か、「降りては」のどちらかであることを確認し、まとめとした。

つまずきは「ては」の働きを見逃していた点にあった。出来るだけ時間をかけ、重複表現が一七音という詩形において如何にもったいないことであるかを体験させた。これが以下の実践の基盤になるからである。

課題Bでは、省いた言葉のかわりに入れた言葉を提出してもらった。これをもとに実践2のプリントを作成した。

五、実践2 入れた言葉の吟味

課題 立派な松の手入れをしている光景に推敲された作品となっ

たと思う句には【】に○印を付け、その理由を説明してみよう。

原句には「繰りかへし」

原句には「降りては」

15	どっころしょ【】		
14	手を休め【】		
13	誇らしく【】		
12	慎重に【】		
11	念入りに【】		
10	立派だな【】		
9	全体を【】		
8	出来映えを【】		
7	記念の樹【】		
6	植木屋も【】	28	枝ぶり【】
5	老庭師【】	27	高きを【】
4	板梯子【】	26	姿を【】
3	兼六園【】	25	どうだと【】
2	高梯子【】	24	離れて【】
1	長梯子【】	23	遠のき【】

降りては眺め松手入れ

繰りかへし眺め松手入れ

- 16 上って見【】
 17 上りては【】
 18 上下し【】
 19 いく度も【】
 20 一日中【】
 21 はしごから【】
 22 高所から【】

右のプリントのねらいは「意図に合った推敲であるかを見分けることができる」である。実施した結果の中から上位を紹介したい。

1 「繰りかへし」を省いて入れた言葉

熟練者の場合の上位二つは順に5の老庭師、2の高梯子。

老庭師降りては眺め松手入れ

主な理由・老いの一徹を感じさせるから。

- ・腕の冴えがうかがえて立派な松の姿が目に見えかぶから。
- ・松の手入れは鋏摘みでは満足に出来ない。年期の入った老庭師でないと出来ないから。

高梯子降りては眺め松手入れ

初心者の場合の上位二つは順に2の高梯子、22の高所から。

高梯子降りては眺め松手入れ

主な理由・高梯子で高さが分かるから。

- ・松が大きく高いことが高い梯子という道具によって表されているから。
- ・梯子を上って手入れしていることは高さのある松を手入れしていることで立派さが分かるから。

高所から降りては眺め松手入れ

熟練者も初心者も「高梯子」を選んでいるので、課題にある「立派な松の手入れをしている光景」を意識していると言える。興味深いのは、熟練者が「老庭師」を選んだ点である。自分の年齢に近いことが共感と呼んだのかもしれないが、老いと松との間には、老い↓年期・熟練の技↓立派さというイメージの連鎖を見ることが出来る。さらに興味深いのは、この言葉に対して初心者は「イメージはしやすいが立派な松の手入れということを強調しているとは思わない」と述べており、関心を示していない点である。年齢によって反応する言葉が異なるのである。

初心者が「高所から」を選んでいるのは、授業者が実践1で行った解説に引っ張られていると思われる。

2 「降りては」を省いて入れた言葉

熟練者の場合の上位二つは順に28の枝ぶり、26の姿を。

繰りかへし枝ぶり眺め松手入れ

理由・具体的に何を眺めたか言った方が良いから。

・松は枝ぶりが命であるから。

繰りかへし姿を眺め松手入れ

初心者の場合の上位二つは順に28の枝ぶり、27の高さを。

繰りかへし枝ぶりを眺め松手入れ

理由・枝の立派さが伝わってくるから。

・松の生き生きとした姿が伝わってくるから。

繰りかへし高きを眺め松手入れ

熟練者も初心者も松の立派さを「枝ぶり」(姿) においていることと意図に合った判断をしていることが分かる。初心者が「高きを」を選んでるのは、1と同様、授業者が実践1で行った解説に引張られていることに因ると思われる。

六、実践3・5 俳句的表現を意識した意味上の重複発見

推敲のためにはより多くの作品に触れることが助けになると思われるので、実践1の例に倣って、「より良い俳句的表現にすることを意識し、意味の上で重複している部分を指摘する」練習を行った。

課題 例に倣って次の句の重複部分を発見しましょう。どの言葉とどの言葉が意味の上で重複しているでしょうか。

例 繰りかへし降りては眺め松手入れ

【繰りかへし】と【降りてはのはは】

実践3の課題句

- ①山車を曳く老いの氏子の八十路なり 【】と【】
- ②参道の紅葉散り初む石畳 【】と【】
- ③秋涼し托鉢僧の墨衣 【】と【】
- ④秋涼し雲版響く禅の寺 【】と【】
- ⑤吹き上ぐる潮風かほる夏木立 【】と【】
- ⑥参道で初音二声鳴くを聞く 【】と【】
- ⑦木の葉かと紛ふ小さな笹子かな 【】と【】
- ⑧花の毬紫陽花群れてなほ奥に 【】と【】

実践5の課題句

- ⑨ただたどし初音の遠く又近く 【】と【】
- ⑩あるくのも足早になり年の暮れ 【】と【】
- ⑪秋桜風をいなして逆らはず 【】と【】
- ⑫新蕎麦や暖簾に紺の匂ふ店 【】と【】

⑬ 風花の生れつぐ空の真青かな

【 】と【 】

練習として選んだのは右の八句と五句である。

熟練者にとっては季語の理解も有り、抵抗がなかったが、初心者にとっては季語や語句の解説を必要とするものがあつた。解説を行ったのは④の雲版・⑥の初音・⑦の笹子・⑧の花の毬であつた。

初心者の解答を見ると、①の「老い」と「八十路」の重複表現の指摘が最も分りやすかつたようである。続いて③の「僧」と「墨衣」。解説をして指摘できたのが④の「雲版」(禅宗寺院の庫裏や齋堂などに掛け、槌で打ち鳴らして報時や座禅、法要の合図などに使用する仏具)と「禅の寺」、⑥の「初音」と「鳴く」であつた。④は雲版と言へば禅寺であることは連想出来るので「禅の寺」は余分と分り、また、⑥は「初音」(その年に初めて鳴いた鶯の声)なので「鳴く」と詠まなくても分るからである。俳句の表現では、例えば「木槿の花が咲く」の場合、「花」か「咲く」のどちらかが省略可能である。「花」を生かすなら「花木槿」、「咲く」を生かすなら「木槿咲く」でいい。「風が吹く」でも今風が吹いているから「風」と言う訳であるから「が吹く」は省略できる。こういった表現が俳句という文芸の特色である。これを踏まえると⑤は「吹き上ぐる」と「風」が重複となる。つまり、「吹き上ぐる」は風の状態、即ち潮風

となつた状態の表現であるから「風」を省き、物に即して「潮の匂い」とした方が臨場感が出るであろう。しかしながら、「咲く」「吹く」を強調したいときにはその使用が有効な場合もある。その過程が句の中で必要か否かを吟味することが重要なのである。この過程が言語感覚を磨き、言葉の力を身に付けてゆくことに繋がると考えるのである。⑤は難しかった。

再び練習として行つた実践5の課題で難しかったのは⑬であつた。これは熟練者も同様であつた。「真」も「かな」もともに強調の働きをするから「真」と「かな」を指摘する必要があつた。「かな」の詠嘆を生かすか、「真」を生かすか、である。これについては後で触れる。

七、実践4 重複表現を回避した推敲

実践6 埋め字による推敲

実践4の課題

課題 (実践3の) ①〜⑧の作品のどれかを選び、どちらかの言葉を省き、そこへ言葉を入れて推敲句を作ってみましょう。

重複表現を推敲してこのように自己添削（全）しました。

原句【】 【↓添削句】 【】

留意点 推敲しやすい作品を選ぶよう助言する。

実践6の課題

課題 試しに推敲してみましょう。【】の中に言葉を入れて

作品を完成させましょう。

⑩ 【】足早となり年の暮れ 【】

⑫ 新蕎麦や 【】 紺のれん 【】

⑬ 風花の生れつぐ空の 【】 かな 【】

留意点 実践5の課題を基にしていることが分るように作品の番号を

号を実践5と同じにする。

実践3を受けて行ったのが実践4の課題で、実践5を受けて行ったのが実践6の課題である。ともに初心者のみに行った。

実践4で出来た推敲句の中に

参道で初音一声命聞く

木の葉かと紛ふ尊き笹子かな

があった。「命」「尊き」の言葉に置き換え、初音や笹子の弱々しさを強調しようと工夫している。実践4は自由に作らせたかったので省くべき言葉の指示をしなかった。この推敲は、推敲句が良い表現となるように見通しを立てて、省くべき言葉を選ばなくてはならないので、初心者にとっては難しかった。しかも、「作品のどれかを選び」、「どちらかの言葉を省き」、「そこへ言葉を入れる」という三段階の作業があり、抵抗があった。そこで実践6のように空欄を作り、入れ替える言葉を考えさせる埋め字の方法に切り替えた。

実践6の結果、⑩は「風花の生れつぐ空の【青】かな」とすることが出来た。⑩は「足早になり」で歩いていることがわかるから上五を空欄にしたが、埋められた言葉は、

こどもらも

カサカサと

おのずから

帰る道

などであった。「【いつしかに】足早となり年の暮れ」となればよいと考えていたが、初心者が入れた言葉も句として安定のよいものである。⑫は「店」とあるが、「新蕎麦」・「のれん」の言葉で「店」と分るから、これを省き、「紺のれん」という物を下五に置いて中

七を空欄にした。残っているのは「句ふ」という言葉である。これをどのように生かすかが問題である。「新蕎麦や句ふがことき紺のれん」のようになるかと予想していたが、埋められた言葉は、

句ひを誘ふ

句ひ漂ふ

客足誘ふ

などであった。活気溢れる蕎麦屋が眼に浮かんでくる。

練習の段階では、このように、ヒントにもなる埋め字形式が有効であることが分った。

八、結び まとめと提案

今回は、俳句結社誌における子ども欄の現状調査と俳句創作指導における推敲の方法の実践を行った。

まず、俳句結社誌における子ども欄の現状調査についてであるが、調査の結果、俳句界の高齢化の危惧から様々な試みがなされていることが分った。学校教育の現場においては俳人を招いた俳句指導などの活動がされている。地域においては俳句大会などで子どもも対象とした賞を設けている。しかし、俳句結社誌においては子ども俳人の育成を行っている雑誌もあったが、その割合は多いとは言えないことが分った。しかも子どもの俳句欄を設けている場合も単に作

品を掲載しているのが大半で、鑑賞や選評などきめ細かな取り扱いをしているものは更に少ないと分った。

次に実践を通して得た結果と提案をまとめたい。

俳句は有季一七音、一つ一つの語彙に敏感にならざるを得ない文学（文芸）であることは前回までの実践でも述べてきたが、この敏感になるということが言葉の力を身につける一助になると考える。例えば一句作ったとする。その一句の中で用いられている言葉が相互に響き合って、他の言葉に置き換えることが出来ない、これを理想としているのが俳句である。今回の実践の試みは推敲を通してそれに近づかせようというものである。その一つとして、重複表現に着目した推敲の方法を試みた。連想できる言葉（省略して差し支えない言葉）を篩いに掛けて削る作業である。今回の実践の結果、実践5と実践6をセットで行うと有効であることが分った。そこで、実践1↓実践2↓実践5と実践6をセットで、という指導の流れで螺旋的に行っていくことを提案したい。作文（文章）を書いた後は必ず推敲をと指導するが、俳句においても同じである。推敲することによって語彙力や言葉の運用力が身に付いてゆくと考える。

（注1）無季俳句、自由律俳句などもあるが、有季定型の立場をとる。

(注2) 五七五、すなわち五音・七音・五音の音節からなる俳句形式

『俳句創作鑑賞ハンドブック』(學燈社 一九九〇年二月刊)

の原則に対し、この音節間をまたぐフレーズがある場合を「句またがり」という。例えば、中村草田男の「万緑の中や吾子の齒生え初むる」で言えば、「万緑の中や」が上五と中七にまたがっている。(『俳句実作の基礎用語』「俳句研究」編集部編 平成一五年一月刊)

(注3) 「添削とは詩歌、文章などに手を入れ、表現の不足分を補い、余分な言葉の無駄を削除すること」「最も有効な指導法として俳句界ではひろく行われている」。(『俳句創作鑑賞ハンドブック』學燈社 一九九〇年二月刊)

参考文献

『添削例に学ぶ俳句上達法』(鷹羽狩行・片山由美子著 日本經濟新聞社 二〇〇五年二月刊)

俳誌「雲の峰」(平成一八年一月・九月号)

俳誌「築港」(平成一八年五月号)

俳誌「山茶花」(平成一八年六月号)

俳誌「苑」(平成一八年六月号)

『俳句実作の基礎用語』(『俳句研究』編集部編 平成一五年一月刊)